記念講演

全国公立学校教頭会研究大会石川大会 8月4日（金）

「豊かな感性を育む場所をつくる」

金沢21世紀美術館館長　長谷川祐子

◆キュレーターという仕事

キュレーターという仕事は、作家、作品を選んで並べるだけではなく、いろいろな関係性をつくっていくことです。その意味でいろいろな意見や体験を共有し、プロデュースしていくような役割があります。キュレーションの仕事には、単独の作家だけをお見せしたりする個展の他、リサーチをしてテーマを決めたり、テーマにそって展覧会を構成するやり方があります。そうすると今まで一緒に展示されることのなかった作品が出会うことがあります。作品Aと作品Bが出会うことによってそこに関係価値が生まれます。つまり関係価値を創造していくことが企画展の醍醐味だったり面白さだったりします。

◆3Ms to 3Cs

それはちょうど20世紀から21世紀に移行する時でした。私は、イスタンブールで行われる国際展覧会（ビエンナーレ　2年に一度同じ都市で開催される国際展）のキュレーターとして招待されました。日本人として、アジアの女性としても初めてでした。その時、「お前は、向こう側から来た。」と言われました。「向こう側」と言うのは、the other side「反対側から来た」ということです。それまでのキュレーターの人たちはすべて欧米かトルコの方でした。反対側から来た人間が何を言うのか、みんなが色々な意味で期待していたり、批判してやろうかと思っていたりするわけです。その中で考えたことが3Ms to 3Csです。

金沢21世紀美術館（画像提供：金沢市）

Man 男性中心主義　Material 物質主義　Money 拝金主義―この3Mによって20世紀は、私たちの生活がとても便利になり、住みやすい世界になりました。しかし、その結果、1999年の段階で、すでに資本主義の行き過ぎに対する軋みの反動が見えていました。私はそれを感じて3Mに代わるソフトランディング（Soft Landing）をみんなで共に生きるために、21世紀を3Cという言葉で表したいと提案しました。その3Csとは、Co-existence（共生）Consciousness（意識）Collective intelligence（集合知）です。20世紀から21世紀へ進むときに大きな修正や後戻りはできません。後戻りができない時にこのままの状態で突っ込むのではなく、どのようにして共に生きられる場所に軟着陸できるのかを考えた時に、この3Csが大切であると考えました。

◆芸術の意味とは

国際展覧会は、2001年9月17日がオープニングでしたが、その1週間前にツインタワーの事件（世界同時多発テロ）が起こりました。世界中の空港が4日間閉鎖されるという大変なことでした。The other sideから来て、初めての国際展を行う小さな日本人の私が、この状況で一体どういうことを迫られたのか―想像に難くないと思います。延期するなどいろいろな意見が出ました。輸送がすべてストップしたからです。その時に、ボランティアのトルコの学生数十名が「やめないでほしい」と言いました。ここで文化的な

イヴェントをすることは自分たちにとってある意味で文明国であるという証明になると彼らは言いました。主催者の財団の人たちにとっても大変な英断だったと思います。私はその時にアートをやることは、一つの意思表明の証になるのだと思いました。

イタリア人のアルベルト・ガルッティは、橋の上にライトを灯すプロジェクトをしてくれました。「今命が生まれる時」というタイトルがついています。ガルッティが考えたのは、病院で新生児が生まれた時に「生まれた子供たちを光が祝福する」というプロジェクトです。それに参加する両親は、病院に特別に設置された電話の番号に電話をかけます。そうすると橋の上のライトが20秒間光ります。24時間いつでも赤ちゃんが生まれると20秒間光るのです。それだけのことか！と思うかもしれませんが、状況は9月11日のテロが起こって10日後の話です。アフガニスタンで猛爆が始まっています。アフガンでは夜閃光が光るとその中で一瞬にして何人もの人の命が失われるのです。イスタンブールでは同じ「光」が新しい命を祝福するものになりました。

芸術というものは、その瞬間、パブリックに共有されることによってどんな意味を持つのか。そして、どんな記憶を人々の中に残すのか。私はそのことをこの体験で学びました。

SANAA球体のパビリオン「まる」（画像提供：金沢市）

◆金沢21世紀美術館の成り立ち

どのような美術館をつくるのかを考えた時に、当時の金沢市長から「子どもたちがこの美術館から様々な新しいアイディアや創造性を得ることができる―未来につながっていく場所であること、グローバルなこととローカルなことをつなげる場所、多様なものが見られる場所にしてください。」また、「金沢には多くの工芸やデザイン、創造産業があります。それに携わっている方たちが世界の新しい技法やスタイル、表現を学ぶことができるような場所にしてください。」と言われました。

建物の中に委託でアート作品を作ってもらうコミッション作品があります。金沢21世紀美術館の中で一番人気があるのはスイミングプールです。こんなシンプルな仕掛けがなぜ年間２００万を超す人を呼ぶのでしょうか。それは、毎回違う体験ができるからだと私は思います。誰と来たのか、どんな天気だったのか等々、思い出として残っていきます。同時に「１／Ｆゆらぎ」には私たちの精神を解放してくれる力があります。水面の波紋の揺らぎや振動が私たちの心を震わせてくれるのです。

「雲を測る男」これは、ヤン・ファーブルと言うベルギーのアーティストによる彫刻です。この作品の上を毎日雲が通り過ぎて行きます。男は、雲を測り続けています。これもコミッションワークです。

美術館は年に何回か展示を変えていかなければなりません。大きな展覧会をする予算が潤沢に取れなくても美術館に絶えず人がいらしていただける状況をどのようにつくったらいいのかを考えました。それでこのようなコミッションワークと建築とを一緒に作っていくことを考えました。この中にはその都度違う誰かとどういう体験ができるのかという多様性、同じ出来事が決してないというインタラクティブな要素があります。

妹島和世さん・西沢立衛さんによる建築家ユニットＳＡＮＡＡや若い学芸員、そして市の職員と一緒に「中にいる人がいつまでもここにいたい」と思う―「ここが私の場所である」と思う―そして、「自分の写真をとったら綺麗」という3つが叶う場所であることを考えました。そこにいらっしゃる人なくしては鑑賞行為、芸術というものは存在しません。美術館の中で人が綺麗に見えるということは、とても大切なことです。女性は、写真を撮った時に綺麗に見える、映える

―私が綺麗であることは他者に対する様々なふるまいに反映されていきます。美しさ、楽しさ、満たされていることはとても大切です。自分のポジション・居場所があることは大切で、それが人を美しく豊かに見せるのだと思います。

◆有機的な文化のエコロジー

金沢市の真ん中の文化ゾーンはとても大切です。国立工芸館、谷口吉郎・吉生記念金沢建築館などこの5年間で様々な文化施設が増えていきました。それぞれが専門の美術館として建つだけではなく、それがどう繋がっていくのかを考えていくことが大切です。

エコは、環境、生態学的という意味からきています。また、お互いが関係を持っていることをエコロジーと呼ぶこともあります。私は館長として、金沢21世紀美術館と周辺の新しい様々な施設をどのように繋げていったら良いのかを考えました。

「KAMU」という名前の私立美術館が金沢の街の中の空きスペースなどを使って7～8カ所あります。美術館ができて以来44のギャラリーがオープンして、30以上のギャラリーが今でも営業をしています。種子がまかれるように一つの建物からこのような波及効果が表れてきています。これも有機的な文化のエコロジーのひとつではないかと思います。

◆未来支度

一見豊かに見えるこの国も環境問題や格差、都市と地方の関係、世代間のギャップ、少子高齢化などいろいろな問題を抱えています。そのことに対していたずらに不安を煽るのではなく、どのようにそれを受け入れ対応する準備をすればよいのか。私は、未来支度という言葉を使っています。

「これはそんなに必要ない。もっと大事なことがあるのではないか」「アテンション」よりも「イグノア」が今大切といわれています。「捨てていく、無視していくこと」今、これがとても必要だと思っています。そういう取捨選択ができる次の強い世代たちを育てていくためにはどうしたらよいのか、一人一人は何ができるのかという意識を持ちながら、どのような新しい協働、共同、ネットワークが可能なのか、そして、私たちが生かされている周辺にはどういう要素があるのか等をエコロジカルに考えることが浮上してくると思います。

◆20周年に向けて

金沢21世紀美術館は、来年20周年を迎えます。それまでにどのような支度をすればいいのかという計画を立ててみました。①過去、歴史から学び、現在をより よく知ること　②新しいテクノロジーを学び、共存を考える　③新しいエコロジー　人間中心で歪んだ現状を他の種や植物たちとの関係を人間中心でない視点で仕切り直すこと。これが新しいヒューマニティの問題となります。これらを芸術の在り方とともに考え、展示していきます。

◆おわりに

先生という職業は、子供たちのアイデンティティ、創造性が花開いていくプロセスを見ながら、それを手助けするという大切な職業だと考えています。

キュレーターという仕事は、関係価値をつくることです。ネットワークをつくる出会いや交流のプラットホームをつくることが私たちの仕事でもあります。このご縁を大事にして、先生たちに具体的な方法論やアイディアをいただけたらありがたいと思っています。私は美術館の館長として、アートを使って、どのように心や私たちの生活を豊かにしていけるのかを考えて実践していきたいと思っています。